救援活動に従事して

中村實郎
本町五丁目

私が数え年二〇歳の時が一九四五年、即ち終戦の昭和二〇年です。当時、即席軍医養成所といわれていた東京医学専門学校の二年生だった私は、学校が信州飯田に疎開していました。

八月の始めに、一年生時代に下宿をしていた淀橋区の戸塚の家が、空襲で焼けたと聞き、小母さん達の消息を調べに東京へ出て来ました。

戦争中なので夏休みはありません。飯田の学校といってもろくな建物がある訳でなく、まして教授も揃わず、大して面白い講義でもないのでサボッて行ったのです。下宿の小母さんは会社の寮母としてよそに行っていました。東京では小さな軍需工場を経営していた親戚の家に泊めて貰い、食べる物の少ない中、乾パンを少し持って、田舎の広島へちょっと、自作休暇を作って帰ることにしました。鉄道の切符は当時はなかなか手に入らなかったのですが、軍需工場の叔父の世話ですぐ入りました。八月五日に東京を出て、六日に広島に着く予定でした。ところが途中、豊橋で空襲に会い、不通となり、他の線を通って名古屋に入り、また、汽車にのり、京都のそばの「膳所（ぜぜ）」でまた汽車を下ろされ、そこでやせこけた中国人達が団体で、線路の上を歩きながら、東の方へ重労働にとぼとぼと力なくいくのを見ました。恐らく、貨車に乗せられて、北海道か、東北の炭鉱にやられるのだろうなと想像し、つくづく敗者にはなりたくないなと思いました。一つか二つ駅を過ぎて、また、汽車に乗り、やっとの思いで福山駅についた時、福山は燃え落ちていて、何でも広島に新型爆弾が落ちたからといって、発車しません。仕方なく空腹の体で、福塩線を府中の方に向けて大きなトランクを下げて、それこそ、とぼとぼと歩いて行きました。叔父達が、たくさん食料を仕入れてくるようにと、長さ二尺五寸、巾一尺、厚さ五寸ぐらいの頑丈な革のトランクを持たせてくれたのですが、中に疎開のための本をたくさん入れていたので、重くてたまりません。でも元気の良い若者です。八キロの線路を歩き終え、最後の便に乗って広島県の北部の三次に着き、知り合いのトラックをとめて、三里先の島根県との国境の村、布野につい

たのは、東京を出てから三日目です。途中、水と数個の乾パンだけです。今のように七〇に手が届くようになると、当時の若さが、力が、不思議な気がします。

倉敷あたりから次々と乗車してくる人の話で、広島の新型爆弾の威力が少しづつわかり始め、空襲のおかげで汽車が遅れ命が助かったことも知りました。故郷の家は医者をしていて、原爆の患者で一杯でした。早速手伝いをさせられ、東京へ帰るどころではなくなりました。医師会から広島の被爆者の手当に行くようにと父の所へ命令が来ました。私が代理で行くことになりました。今なら無資格者ということで大変でしょうが、当時は医学生の角帽を被った私が代理で行くのは何でもない時代で、解剖学、生理学といった基礎的講義しか習っていなくて、臨床未経験の私が、腸チフスや赤痢のはやっている村で、原爆患者をも含めて、往診していたのですから今から思うとぞっとします。まして、ガーゼやホータイ等も入手が困難で、何回も洗っては使っていました。今は用いられませんが、赤チンと、かければジュッと白いあぶくの出るオキシフル（オキシドール、過酸化水素水）だけは何とかありました。父の命令で、見よう見まねで速成の医者になりました。今度は双三郡医師会医療班として広島に救護に行くことになりました。医療班といっても地方の医師は戦争で召集されているので、無医村が多く、保健所の所長の伊藤先生が、本当の医師だけで、あとは保健婦が三人、それに私というみすぼらしい構成です。

芸備線に乗って広島駅の午前の、たしか、戸坂（へさか）あたりで下（お）ろされて、本川小学校まで、歩かされました。爆心地と言われる相生橋のそばの小学校は何とか形骸だけが残っており、そこに並べられた無数の患者のうめき声、手のない者、足のない者、顔のめちゃめちゃな人、水、水という声、地獄を見ました。医薬品といっても赤チンぐらいしかなく、脱脂綿もないので、一つの脱脂綿を大事に赤チンに浸して、患者に塗るだけです。赤くやけただれた火傷には何の効果もありません。ただれた傷の中に、蠅が卵を産み、うじになったのも見ました。あの当時は今のように、点滴注射というものはありませんでした。リンゲルを五〇〇ccから一〇〇〇cc大腿内側に射って、熱いタオルでもんで吸収させるのです。リンゲル注射などもちろんありません。父は自家製のリンゲル液を作りました。食塩をフラスコに入れ、蒸留水を足し、一時間ぐらい滅菌して畳針のような大きな針で腿（もも）に注射するのですが、食塩水が体に入る時はとても痛がります。しかし、毎回続けていると、三日目ぐらいから痛みにも慣れてむしろどんどん射ってくれというようになります。栄養失調の時代ですから、こんな原始的な注射でも、副作用もなく、化膿や敗血症を起こすこともなく結構回復が良かったようです。特に原爆被害、火傷が少なく赤痢、腸チフスのような下痢だけの患者には良く効きました。御存知のようにこの頃か

ら黒い雨が降るようになりました。雨のもれない部屋を選んで夜は寝ているのですが、電気もなく、冷えてトイレに行く時、雨のもる中、雨音を聞きながら焼けただれ、うらみ、のろい死んでいった人々の側を、ローソクに火をつけて、無人のトイレまで行くのはあまり気持ちの良いものではありませんでした。思えば未だ一年生の時の三月十日の東京大空襲の際は、母校のそばにいたので、学校救護に狩り出され、解剖教室の守備に回されましたが、その時もそうでした。焼夷弾のさく裂、火事の色で教室に並べられている解剖用の死体が時に輝き、時に暗くなり生き返ってくるのではないかと思うほどでした。広島の場合は、火事の風景はないものの、雨が加わっているので、ローソクの火がゆらゆらゆれて、周囲の影を、特に死人の姿にあやをそえて、夏とは言え、肝を冷やしてくれました。でも二日ぐらい泊まっていると、すっかり馴れました。ただ困ったのは、衛生材料や薬品のないことでした。それに食事のことです。近所の民家に食べに行くのですが、冬瓜（とうがん）ばかりです。その上、料理が上手でないので、これには参りました。東京から帰る途中は、殆ど食べないでも文句一つ言わなかったのに、ふる里に帰ると贅沢になるものです。

このような救護班活動には、八～十月に五～六回、三～五日間ぐらいづつ参加しました。ずっと父の名前で、父の代理として出ていました。一度、駐在所が来て、文句を言ったことがあります。「あんたは医者ではないから、本当は違反なんですよ」と。

兄は当時九州帝大の医学部にいて、長崎造船所に学徒動員で出ていました。ちょうど、九日の日は近くの漁村へ、当番で魚を買いに行っていたので助かりました。かくして、二人の若い医学生は共に広島の原爆救護班に参加したので、原爆手帳を貰うことになりました。